

29



hina no marebito のまねひと

コンビニを営み、1988年に生鮮も含めた食料品店を開店する。業績は順調でその数年後、立川に2号店を開店。その

安売りをしない、チラシを撒かない。それでも創業40年以上黒字を続ける株式会社福島屋。都内に数店舗の食料品店と花屋・レストランを経営している。同社を創業し、現在会長を務めるのは福島徹。その人生はとても波乱万丈だったようだ。

幼少期には祖父の事業が倒産、青梅から立川に出た。両親は今川焼屋や萬屋などを営み商いの道に入った。福島は在学中に羽村で酒類販売免許を取得、酒営業を始める。その後

生産者と顧客の一体的取り組み

株式会社福島屋会長

福島徹氏

(68)



2号店は、困難の連続で、福島の商人としての自信を打ちのめした。

来る日も来る日も売場を変える……。半年の間寝る間もなく、倒産の二文字が頭をかすめた。転機は開店から6カ月ほどたった頃に訪れたようだ。「毎晩店の閉店後、同様に陳列変更をしている中でお客様の声や顔が脳裏に浮かびました。そして、激しい反省と感謝の念で心がいっぱいになりました」。そんな日々があつてから少しずつ業績は好転、その半年後には超繁盛店へと変身を遂げていった。

福島屋が消費者に支持される理由を尋ねてみた。「二つ目は生産者さんとお客様との一体型の取り組みです。二つ目はお客様の目線にたった棚づくりです。それをお客様から協力いただいたMPS（ミセス・プロズ・スマイルズ）というチームをつくって実行してい

ます。また、生産者さんとのコミュニケーションには意思が通うように何度も訪問しています。困ったことや希望を解決していく姿勢と良品なのに売れない農産物などを積極的に扱いました」。

福島屋は10年ほど前に社長を交代。「新社長は長男の福島由一です。その後の業績は順調で、今年4月には虎ノ門に新店を開設します」。都心では六本木店、秋葉原店に続いて3店目だ。

今、福島は、スーパーの経営から少し距離を置き、農家や同業者のコンサルティングに余念がない。その目は全国を向く。最近では生産者と消費者をいち早く結び物流でJAL（日本航空）との提携話も進んでいる。取材後も「これから都内で打ち合わせ」と言い爽やかに駆けていった。

〈文中敬称略〉